

研出蒔絵（とぎだしまきえ）

絵漆（えうるし；ベンガラを混ぜた赤い漆）で文様を描いた上に、金粉や銀粉などを蒔きつけ、固化後透き漆（すきうるし）あるいは黒漆で上塗りし、さらに固化後木炭を用いて文様を研ぎ出し磨き上げて仕上げる技法。平安時代に発展した蒔絵技法のひとつ。

仕上がりは、粉を蒔いた文様の部分と地（背景）の部分が同一平面になる。粉を粗密に蒔くことで奥行きのある表現も可能となる。

螺鈿（らでん）

貝殻を平らに磨き任意の文様の形に切り抜き、漆地などに貼り付ける装飾技法のひとつ。

螺は貝を意味し、鈿は散りばめ飾るという意味。

使用する貝の厚さにより、厚貝螺鈿（あつがいらでん。1.2mm程度の厚さの貝を用いる）と薄貝螺鈿（うすがいらでん。0.08mm程度の厚さの貝を用いる）とに分けられる。

貝の種類は夜光貝・アワビ・白蝶貝・黒蝶貝・アコヤ貝など様々。

卵殻（らんかく）

ニワトリ・ウズラなどの卵の殻を用いて漆地に装飾する技法。

漆は顔料と混ぜ合わせるにより様々な色漆を作り出すことはできるが、漆そのものの持つ色があるため、純白の色漆は作れず、ベージュ色になってしまう。したがって、卵殻技法は純白を表現するために考え出されたともいえる。

<参考>

蒔絵の技法としては、研出蒔絵の他に平蒔絵・高蒔絵・肉合（ししあい）研出蒔絵などがあるが、螺鈿・卵殻等の種々の装飾技法と組み合わせることにより、多彩な表現が可能となる。